僕がここに彦中五ケ年の業を經て、しみ〴〵と感じた事は第一、無條件に――いかなる辯解をも許さない。又いかなる方法によつても――成績優等であることの必要。第二、他人に聞かないで自分で自力で考へることの必要である。

第一項はいかに說いた所が本人の自覺と努力によらなければならない。又成績優等のものがぽか〳〵出來るものでないから問題外として、第二項に就いて考へて見たい。

明治御維新になつて鎖國の夢は完全に破れ、西洋文明の秀れてゐるのを知つて日本の人々は我が國の興隆の爲大いに努力し爲に學問が大いに進歩して、爾後六十餘年今や世界一流の文明國と迄なつたのであるが、概して明治時代の學問は暗記的であつた。大正昭和の時代になると暗記的から、もつと科學的な推論的學問にかはつて來た。而して現代高等專門學校の入學試驗の暗記的科目の問題はなるべく推理的なものが出る樣になつてきた。即ち現今は大体推理的の世になつたのである。暗記の世ではない。

又自分で考へること即ち自力で推理したことは、機械的に暗記したことより長く覺えて居り又忘れても再び考へ出しうる。又考へれば考へる丈思考力が强くなる。一体學校で、實社會に出ても役に立たない數學なんかやるのは主として頭の教練をやつてゐるのであると僕は思ふ。

然らば考へるところの頭はどうして造るかと云ふ問題である。此は前に述べた所にも云つた如く考へる本は考へることによつて造るのである。要するに自ら苦しんで人より僅か多く考へることによつて非常に大きな推理力の差が出來てくる。

以上で大体推理力の必要なことが了解されよう。それで諸君は此推理力を養成する爲機會ある毎に更に機會を作つて自ら考へる樣に努力されることを希望する。それには學校の問題は自力でやることが第一、もし豫習出來なかつたなら教室で先生より一題先から問題をして行くことを努めて貰ひたい。又一方運動方面では――僕は少年野球の經驗しか無いから次のことを云つて素人奴が、と言はれるかも知れないが――野球部にマネーヂャーが居るが併しマネーヂしない。又コーチャーの所へルール策戰の研究に行つても實際にしてゐる樣子もない。此は他の學校も同じである。併し各人が考へて策戰を知つてもそれをよく理解して實戰に應用しなければいけない。先代からの理論の受繼ぎでは駄目だ。他の運動諸部も同樣である。も少し本を讀

んで研究し此は自分に適切だと云ふのを取つて習つたらよい、門外漢の私が僭越なことを言ふやうだが之だけのことはどうしても必要である。今年大朝の全國野球大會で嘉義が中商に敗けたのは吳投手が疲勞してゐたことも大なる原因であつたらうが中京とて同樣に疲勞する筈である。そこに吉田投手の偉大な所があると僕は思ふ。即ち吉田君は弱敵にはそれ相當に强敵には充分對抗して科學的に考へ經濟的に投球した結果疲勞も少なかつたと思はれる。即ち機械的に投球せずよく考へて投球した結果だと思ふ。

此に於て考へることは啻に學問だけでなく、あらゆる日常諸般に事に關して考へなければならない。而して他人より聞いただけでは駄目でそれを自分が咀嚼しなければならない。

而して推理力理解力の元である「自ら考へる」ことを强調して、諸君の反省をうながしたいのである。諸君、他人に賴らず自力で考へる習慣をつけられよ。

人死する時其言ふことや良しと云ひます。切に諸君の努力を祈る。

太　平　洋

田　中　正　夫

廣袤幾千里!! 遠波縹渺として限なき太平洋「太平」の名の如く、久しく桃源の夢を貪つて、靜かに波打つて居た此の海にも文明はめぐりて、世界の低氣壓は今や此所に集中せんとして居る。

靜かに往時の歷史を按んずるに、海はすべて文化の天使であつた。文明の搖籃は遠くその端をオリーブの花咲く地中海に發して、其所にはあらゆる絢爛たる文明の光が放たれて、希臘と云う文明國が當時の世界に君臨した。爾來地中海を中心として

幾多の文明國が繪卷物の如く展開された。しかし地中海の文明は移つて、大西洋時代が到來した。一朝此の波に目覺めた英國は、大西洋を槍舞臺として、世界の各方面に向つて活躍の翼を擴げ「我領土に日沒する時なし」の傲語を放ちて世界を睥睨する國となつた。

されど「バルカン半島」に端を發して、全歐洲を砲煙彈雨の中に包み、修羅の巷と化した低氣壓も此れを除幕として此の時代も終りを告げると共に漸次東進して、翠波白波世界第一の大平洋の舞臺に鎬を削る時代となつた。

第二の「バルカン」それは必ずや世界に稀有の大國支那であらう。靜かに地圖を瞥見するに、西には日本東には膨大なる領土を有する米國、南には天然の富源の財藏、英國の寶庫と云はれる濠洲の三大列强が大平洋をかこんで互に他を睥睨して居る。

他には眠れる獅子の稱ある支那、北にはロシヤが產業五ヶ年計畫をふりかざして復興の意氣物すごく、その勢あなどり難いものがある。

特に米國は富貴各國を壓し全世界の市場を左右する樣になつた。嘗て希臘の文明が羅馬と云ふ大帝國に移つた樣に今や文明は英國を去つて、燦然として彼の頭上に輝き、すべて、世界第一とうぬぼるゝ身柄となつた。かくて米國は太平洋を我物と云はぬばかりに、巨大な魔手を延しフイリツピンを領し中央には太平洋の十字街路とも云はれる布哇を懷いて多志滿々たるものがある。一旦にして各國の勢力の均一が破れたならば如何なる時變が勃發せぬとも限らない。これがために太平洋の檜舞臺で彼の物質的に無比の强大米國と、砲火を交ふる時が到來せぬとも限らない。今や彼は長い間保守したモンロー主義をかなぐり捨てゝ、隨一の發展地極東に鋭い眼を見張り虎視眈々たるものがある。支那!! 米國をば後楯として自國より我勢力を驅逐し日本を經濟的に孤立せしめんとして、排日!! は毎日新紙上を賑して居るではないか。而して日本の現狀を見る時果して如何なる感に打たれるか!! 此の貧弱なる無原產を!! 此の多事多難の難局を打破する方針政策や如何?

思ふに各國は世界大戰の辛辣なる苦酸を喫した事は想像に難くない。かくて世界平和の「スローガン」をかゝげて、軍縮は各國に絶叫されて居る有樣である。されど戰爭は永劫に、不滅である斷言して憚らない。異人種が易く統一結合する事の至難は如何なる凡人と雖も認め得る事である。

國民よ!! 軍備を等閑に附してはならない。各國は益々內容の發達充實を謀つて居る。他日を期して鋭利な刀に益々磨を掛けて居る。いざとなれば弱肉强食だ。それは過去の明らかな歷史の示す所で、世人が如何に頑迷固陋の見を有するもそれは何の役にも立たぬ。

今や太平洋を樂々と飛行機が飛ばんとして居る。國民の心は果して健在であらうか。此の時にあたり我等大いに覺醒する所あつて東西文明の統一、太平洋時代建設を目標に猛進を誓はうではないか。

（六・八・一〇）

赤鬼魂の奮起を望む

近藤國藏

諸君が彥中生徒として入學されて以來、誰れしも一回以上はあの監視部屋の前に掲げられてある數個の額を見られたことゝ思ふ。あの二段に掲げられてある額は何を物語るものであらうか。一見して知る如く十數年前の彥中の全盛時代を物語るものではないか。創立以來數十年、全國に名ある金龜の御城の元で、或は勉學に或は運動に赤鬼魂の燃ゆるが如き意氣と努力を以て縣下に、關西に、否全國にまでも其の英名を轟かせた人々の面影ではないか。あの勇壯なる姿を見よ! 燃ゆるが如き意氣は赤き血潮となつて、其の面上に溢れてゐるではないか。

然れども今此の寫眞の下に立ちて觀めた時、如何なる念が湧いて來るだらうか。我が此の下に立ちて觀めた時必ず思ふは强い自責の念である。先輩に恥をかゝせない樣、又負けない樣努力せねばならぬと云ふ念である。而してこれ必ずや吾一個人としてのみ感ずることでなく、彥中生徒たる者が皆感ずることだらうと思ふ。然れども諸君! 今少し靜かに現在の彥中たるものをながめられよ。あれ程意氣あり名聲高かりし同じ學び舍に、學ぶ我々の此處數年來の意氣なきを見よ! 五六年以前は其の以

前のそれ程でなかつたとしても、尙相當の意氣あり運動部は近縣に名をなしてゐたではないか。運動々々と喧しく云はれる現今に於て、尙運動各部が以前以上に振はないは何故だらうか。それは諸君も知る如く彦中は現今實際に團結心が缺けてゐるのだ。戰ふ兵士如何に强くとも、其の國の一致團結以て國難に當るの覺悟がなければ戰に勝つ能はざる如く、彦中が如何に良き選士を擁してゐても、又如何に運動部員諸君が奮鬪して下さつても戰に勝つ能はざるは勿論であり、士氣の上がらざるは當然である。

現在彦中は段々其の途にあるとは言へ、未だ一般的に元氣、意氣、團結心と云ふものが缺けてゐると云ふことは先生や又他の人からも云はれてゐることであり、又事實である。然るが故に何時も負けるのだと云はれても我々は一言の答辯すら出來ないではないか。戰あり負ける度毎に彦根町の人々や、先生からまで「彦中は一向駄目ではないか」「彦中魂は何をしてゐるか」「一度彦中健兒の赤鬼魂を見せて貰ひたい」と云はれた時諸君は何んと返事されるか。僕は其の樣な時「これ見よ」と云つてそれ等の人に見せてやるだけのまとまつた意氣や其の現れがないのが殘念で〳〵で耐らない。又かの先輩の元に立ちし時に感ずる恥しさであり、なさけなさである。

併し我々卒業せんとする九十餘名は、名譽ある歷史を作つてくれた先輩に對して、報ゆることは出來なかつた。而して我々は後數ケ月のみにして、以後何を爲すことが出來ようか。將來の發展は諸君の雙肩にあるのみ。まだ數年間在校せられる前途有望の諸君が、一同に醒め、燃ゆる赤鬼魂を發揮し一致團結以て學問は云ふに及ばず現今不振の此の彦中運動各部を全國に冠たるものとして、其の名を全國に轟かされんことを切望するのである。

❖　❖

❖

青年

吉本博次

青年は若さの主体である。意氣あり希望あり慾望あり青春の氣に充ち滿ちてゐるものである。意氣ある行爲を以て青年の本体とする。柔弱な行爲、果斷に缺けた精神は斷じて排斥して如何なる事も男性的で無くてはならぬ。若さが漲つてゐなければならない。正々堂々と大路を濶步し大道に潑溂とした姿を見出すものである。希望に胸を轟かせ動悸は正に意義ある人生の門出を暗示するかの樣に全身に響く。慾望は現實の世の快樂を夢見つつ活寫となつて白い幕の中に浮き出される。人生の綠葉の候であつて何を言つても青年時代なのだ。青年の意氣は天を衝くかの樣に、又騎虎の勢に乘つて突進するものであつて、前途を顧みず、動靜に鑑みず、徒に心を走らせる不十分な缺點を多分に持つてゐる。よろしく青年は沈着、克己、忍耐、等を含味せねばなるまい。意氣ある中にも思慮辨別あつて、事に處するに冷靜でありたいものである。又自己に打勝つ克己の精神も亦涵養するの必要を見出し、辛苦艱難も忍耐の一語に治め、青年の步行航進の途に於ては山なす荒波も一蹴して光明の世界に處世の良法を發見するのである。時には暴風雨もあらう龍卷も起らう。

今や數多の難局に直面してゐる、思想上に於ても、あらゆる方面に於て我々青年の精神はそれらの飜弄物とならんとしてゐる。浮華放從の弊あり。外的內的の誘惑物簇出してゐる。國家より見れば我々青年は第一線の國民、即ち國家の中堅となり我が誇ある帝國を雙肩に脊負つて立つべきものである。又我が國家はそれに期待を懸けて心身の健全なる青年の出現を今や遲しと待顏の時、奮勵努力の精神燃えずや。輕佻詭激の風を矯めて、敎育勅語の聖旨を遵奉して今や全身に動員を下すの時なり。東雲の空にたなびく紫雲は前途を祝福する朝を表徵してゐる。

徳川時代の日本海運

小林弘

極東に燦然と輝く我が日本帝國は四面皆洋々たる海にかこまれてゐる。四面海にかこまれてゐることが我が國をして遠き建國以前より海運の便を有たしめたのである。

皇祖神武天皇は舟師を率ゐて東征したまひ大和の國に即位され給ふた。其の後景行天皇の西征、神功皇后の三韓征服、應神仁德の御代に新羅高麗百濟の來貢、奈良平安朝時代の遣唐使の往來、元寇の兩役、足利時代に天龍寺船八幡船の活躍、豊臣秀吉の朝鮮征伐、豊臣德川兩時代に朱印船の雄飛等あまりに多いのである。此等は歴史上有名なる事實を上げたのみであつて其の他の小さき海運——海運と云つても古代は主に征伐に行くに用ひたのであるが——に關するものは枚擧するにいとまあらずである。

朱印船雄飛時代において國民の頭に海運についての考を有つものが多くなり海外發展の志を有してゐる者が少くなかつたのである。然しその後に鎖國と云ふものは大變我が日本海運にいや日本海運ばかりでない日本の國勢延いては世界地圖の上に大なる影響をあたへてゐると私は信ずる。然しながら鎖國をする前には德川幕府は大いに海外發展を奬勵したことは一代將軍家康の項の外政についての方針を見れば知り得られるのである。家康は初め蘭人ヤンョース英人アダムスを厚遇して海外の形勢を問ひ呂宋及西班牙等に書を贈つて船舶の日本寄港を勸め平戸、長崎、下田の三港を開港場となし又日本船の海外渡航を奬勵して貿易の發展をはかつたのである。文祿の初秀吉が朱印船の制度を創め家康之につゞきて海外渡航や海外貿易を奬勵してより日本海運は長足の發達を致し殆ど東南洋を風靡したと傳へられてゐる。

慶長元和の朱印免狀を授けられたる船は實に二百隻その渡航國は十ヶ國を算へたと云ふのを以てもいかに此の時日本海運が盛觀を示したかを知るに充分である。

此れと同じ時代に多くの海傑海商が皆南方地方に活動を試み成功してそこによき自己の住所を發見し多くの邦人を呼び來りて日本人街を作つたのである。その主なる人物は呂宋助左衛門、山田長政、天竺德兵衛、濱田彌兵衛などで呂宋助左衛門は海外通商を力として呂宋に侵入し山田長政は暹羅に入り暹羅の大名となり大いに大和民族の氣をはき德兵衛は三十五反の帆をはつた船で遠く印度を探檢し彌兵衛は臺灣に蘭人をこらし國史上に光りを放つてゐる。そして南方の日本街は本國日本との交通をたもちながら陸上に、海上に猛威をふるつたのであつた。若し我が國に德川の鎖國政策なくば又外航禁止なくば後世東洋貿易の覇權は我が日本國民のものだつたにちがひない。又安南印度を手に入れ濠洲大陸を發見するのも大和民族だと思ふ。そしてその日本人町は南洋地方に誇る大日本都市になつて文明文化の中心たるべきものだ。

然しながらそれは單なる空想にすぎないけれども何がために家康は初め奬勵した海外發展を禁止しなくてはならなかつたか？

天文十年葡萄牙船來りて日歐貿易の端を開き天主教を傳播した。その天主教は漸次勢をまして教徒中に幕府顚覆の謀を企つるものありこれが發覺するや家康は嚴令を發して西班牙、葡萄牙の來航を禁じ家光の時朱印船の外航を禁じ海外在留の邦人に歸國せしめた。そして遂に幕府は左の如き意の海禁令を下した。

1 日本船の外航禁止
2 日本人の外國渡航禁止
3 外國居住の日本人死刑

その後南洋の日本街の邦人はあるものは歸國し或者は死しなどして遂にさしも猛威をふるひし日本人街も滅びてしまつて唯過去の歴史上のこととなつてしまつた。

此れより後海外との交通は絶えてしまつて唯國内の海運のみとなつた。二百餘年と云ふものを眼を世界の動きに投ずること

なく太平の夢を貪つてゐた。

鎖國時代に於ける外國の海外發展はどうであつたか。

英國は西暦一五八五年即我が日本の豊臣時代の末（約三百五十年前）早くも海運に目覺め北アメリカにヴアジニヤ植民地を建てアメリカ浸略の根據とし、一方印度洋地方にも手を擴げ印度に東インド會社なるものを一六〇〇年に建設した。その後十八世紀の中頃カナダ全土を略取し、一八七七年完全に印度を手にしインド帝國を建設す。此の後エヂプト、大洋洲等世界各地にその勢力をのばした。そして世界の海上權を握りしめてしまつた。

佛國はどうであつたか——。一八世紀末は佛國大革命の時にあたり海外發展はなくナポレオン時代はヨーロツパ全土を征してゐたが眞の領土たることは出來なかつた、たゞ北米に、印度支那半島地方に植民政策を用ひたのみである。

米國は一七七六年約百三十年前獨立宣言しアメリカ合衆國を造りそれより今日の國位を作るまであらゆる努力を盡して來たものである。

オランダは一五八一年建國して一六〇二年早くも東インド會社設立にまで到つてゐたのである。

その他多くの國はこの時代に海外に大なる發達をとげたのである。それにつれて世界諸國の文化は發展に發展を續け現今の樣な世界文明を作り出した。

海運の便を利用して各國は漸次東洋に入つてくる樣になつた。幕末に來りし米艦露艦等により天下は湧きたち上を下への大事件だつたが勢如何ともすること出來ずつひに三百年來の鎖國政策をといたのである。その時世界文化の發達を見て國中のものが驚歎の瞳を瞠つた。後明治維新より現今まで約六十年間に我が國は世界のありとあらゆる地方から出來得る限りの多くの文化を吸收して急ごしらへの文明國になつてゐるのである。その間に日清、日露の二大戰爭を行ひ大勝利を得て初めて世界にその存在を知られ一等國になつた。それにともなつて世界に航海して行く船舶も數をまし今の日本海運を作り上げたものである。

海國日本にとつて海運はなくてはならぬものであり特に島國なる故により重大なる事であることは云ふまでもないことであ

つて此後大いに海運に努力すべきであると思ふ。

此れは夏休みを利用して研究してみたものであつて、文は下手であるが大体の德川時代日本海運と世界の列强國の時代の海外策を知り得ると思ふのである。

一九三一・八　（完）

蟻

杉橋均五

初夏の夕大きな石に沿うて忙しさうに働いて居る蟻を靜かに觀察して見る事は本當に興味ある事である。

吾々が普通に見られる「あり」即ち勞働蟻又は職蟻とも言ふのは男性化した女性とも言ふべきものである。この勞働蟻の習性の中には實に驚くべきものがある。

「あぶらむし」を保護してその腹部から出す甘い汁を食料とし、或は他の「あり」の幼虫を捕へて來て奴隷にするものさへある。これ等は彼等の習性の中でも最も驚嘆に値するものであらう。又彼等は道具一つ持たず人間も及ばぬ程の恐るべき彼等の底力と、僅かに二本の鋭敏な觸角とによつて土中に隧道を穿つて立派な巣を作り上げてこの巣の中に幼虫と踊とを養ふのである。

かくの如く蟻の世界は女性が建設の第一線に立つてゐる。又女王蟻の周圍には仕事をしないのらくらした雄蟻が居り、是等の生計一切をするのはその女性の勞働蟻である。

ハルムス氏の研究に依ると彼等勞働蟻は全く生殖力が失はれたのではなく彼等でも卵を產むに足る生殖器は具はつてゐるのであるが只發達しないまでである。彼等は勇敢にも烈しい勞働に毎日從つてゐる爲、四——五年の長い年月生存出來るものを僅かに四——六週間の生涯を送らなければならぬ。とは彼等勞働蟻が如何に精神を消耗するかが分り實に涙ぐましくもなる。又氏は女王蟻を除いた蟻の生活を觀察したところ、勞働蟻の優秀なものが女王の位置に立つてその蟻の生命は非常に長くなつてゐたと云ふことである。

全く慾望煩惱のない科學的に出來上つてゐる世界である。

動物の獨立

北村清嗣

動物の獨立と云つた所で漠然たるものであるが、今此處に動物の獨立の遲速につき、其れに關係したる事項を述べて見たいと思ふ。

先づ獨立の早いものについて——

其れには顯微鏡的のものが著しい、今、原生動物たるアミーバの如きは分裂法にて繁殖し何れが親か子か解らぬ其れから互に別れてすぐさま立派に獨立するものもあれば、其れより少し高等なる棘皮動物、腔腸動物、海線動物の大方は有性繁殖も行ひ即ち二通りの繁殖法を行ふものもある。然し、其れでも無感なる親は自分の子の事については少しも考へてゐない樣に思はれる。其れより尙一段上なのは、有性繁殖の場合の卵で、其の發生迄に要する榮養分を與へ、其の外側には殼を造つて、保護するものがある節足動物や魚類鳥類の如く……。

さて、今迄述べた樣なものより更に高等なる喃乳類は如何？ 所謂、胎生にして、彼等とは一段の差がある。母体内で完全に榮養を與へ完全に保護して後產み出される生まれたる子は完全に獨立の生活が出來る迄、親は生存して養育の任務を果す。子は獨立の生活を營むに至らば、其れで親は始めて安心して死ぬと云ふ風になつてゐる。

かゝる中に於て、萬物の靈長たる人間を見よ！

母体内の胎兒を寶の如くにして守り、生れたる子は一、二年の間は赤兒として、大事にする。七八才迄は幼年としてあつかひ、九、十才より十五、六才迄は少年と稱する。昔から此の項にして立派に獨立したる偉人もあるが、大低の親は此の項にして、獨立等とは夢にも考へてゐない。青年と稱せられる樣になつても「若者で未だ／／駄目だ」と考へてゐる、青年期過ぎて漸く親は安心する。中には多大なる資產を持つ樣な人々（親）は死ぬ迄子供の事について、心配するものである。

親（人）の情愛は斯くの如きもので、感謝せずには居られない。然し、萬物の靈長たる人間が此の有樣は何事ぞ！ 生物界に珍らしい現象ではないか！ 原生動物の如きものと如何程の差があるか？

さて今迄述べたる事を顧みれば、下等動物は獨立は早く高等動物になるに從つて、獨立は遲くなつてゐる。

依つて我等が獨立することに就きて親の情愛に感謝すると共に、早く成功して立派に獨立する事に心懸けねばならぬと思ふ。

蟬

西村覺太郎

蟬の口は普通に關節ある長吻となつて物を刺し其の液汁を吸收するに適する。觸角は複眼の前方に位し頭は短くて頭の先に單眼がある。前翅は後翅よりも大きく疊んだ時には腹部を蔽ふてゐる。翅は膜質透明又は不透明のものもある。雄は腹部に發音器を有つている。これは大低半楕圓形であるが中には三形角、長楕圓形のものもある。蟬の種類には「アブラゼミ」「ツクツクボウシ」「クマゼミ」等がある。

Aあぶらぜみ

体長は三糎乃至三・七糎位で頭部の背面は三角形をなし、複眼は黑色で圓く單眼は光輝ある樺色をなしてゐる。觸角の長さは六粍位で頭部と胸部は黑色で光澤がある。赤褐色の口吻は長さ十二粍ばかりあつてそれを木の枝又は幹にさし込んで樹液を吸收する。翅は前後共に赤褐色で脈は綠色をなす、雄には發音器がある。

Bみん／／ぜみ

鳴聲が「ミンミン」と聞えるので「ミンミンゼミ」と言ふ名が出たのであろう。体長は三五粍内外頭部は三角形、單眼は淡黃褐色で複眼は淡茶色である。觸角は黑く口吻は綠色である。肢も綠色をなしている。腹部が末端部で急に細くなつてゐるのが一特徵である。翅は前後共に透明で脈は淡褐色を帶びてゐる。

Cくまぜみ

体長は四〇粍乃至四五粍で「ミンミン」より大きい。鳴聲は「シャシャシャシャ」といひ頗る高い。全体は黑色でぴか〳〵と光つて居る頭部は三角形、複眼は楕圓形三個の單眼が褐色をなし、觸角も口吻も黑い。中胸部は大きく、翅は「ミンミン」と同じ、脈は基部は黑色、大部分は綠色を呈してゐる。

トノサマガヘル（金線蛙）の外部觀察

國友照夫

A体の區分　頭胴四肢の三部に區分す。

B皮膚　1 蛙の皮膚は裸出し常に粘滑にして濕潤なり、之は皮下に腺ありて一種の粘液を分泌するによるものにして皮膚の呼吸を營むに重要なることなり而して蛙は他の動物に比して皮膚呼吸の作用特に著しきものなり。

2 皮膚は綠色の縞模樣ありて棲息の場所に似たる所謂保護色をなす。

C耳　耳殼及び外聽道なく殼膜其のまゝ現る之れは水中游泳の際水の抵抗なきを以て蛙に取りては構造妙なる所なり。

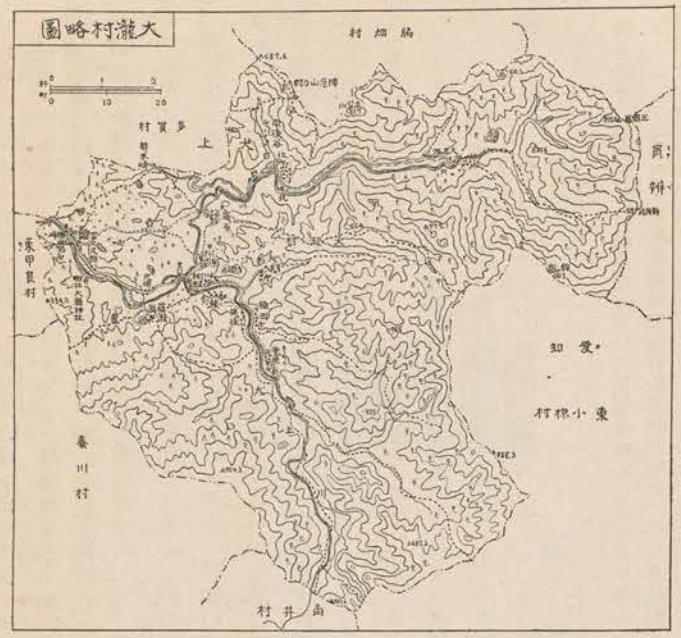
D眼　眼は頭上兩側にありて割合に大きく突出せり故に体は水中にある場合にも見るに適す可動的の上眼瞼と下眼瞼と甚だ薄くて自由に動く瞬膜とによつて保護されてゐる。

E鼻　鼻孔は口吻の前端にありて開閉の自在なる辨を有すこの辨は其の呼吸に欠くべからざるものなり蛙は肋骨を欠くを以て胸部を擴張して吸息する能はざれば鼻より空氣を吸ひこみて咽頭部に致し然る後口を閉じ恰も食物をえんが如くして肺中に空氣を送るこの時辨は空氣の逆出を妨ぐる用をなす。

F肢　四肢中前肢は小にして体を支ふるに足るも後肢はよく發達して跳躍すること巧なり又肢の趾間にはミヅカキを有するを以て水中の游泳に適す。指は前肢に四本後肢に五本あるも蛙によりては番外趾と稱するものあり而して生殖時期に至れば雄の肢に瘤を生ず。

犬上郡大瀧村誌

多林慶藏



一、地文

位置・境域　犬上郡の略〻東南、鈴鹿山脈の西斜面に位し、南北一〇粁、東西一二粁の大村にして、犬上川の上流を占め、面積約七七、六平方粁に及ぶ。東境に三國嶽（八一五米）・鞍掛峠（七九一米）聳え、岐阜・三重兩縣に境し、南は鈴ヶ嶽（一〇一三米）其の他の高峰によつて愛知郡東小椋・角井兩村に連り、西は愛知郡秦川村、犬上郡東甲良村に接し、北は稍高い陣屋（六八〇米）・高宝山（八一七米）其の他の連峯によつて脇ヶ畑・多賀兩村に接してゐる。本村は周圍に山を繞らし山が自然的の境界となつてゐる。本村は十五大字に分れてゐる。

大字　川相（ナヒ）・佐目・富之尾・萱原（カイハラ）・大君（ミ）ヶ畑・霜ヶ原・南後谷・小原・大杉・樋田・佛ヶ後（ウラ）・藤瀨・一ノ瀨・檜崎・壷に分たれてゐる。

地形　大部分は古生層に屬する石灰岩から成り、僅に溪谷の低地に第四紀層を見るのみである。鈴鹿山脈は著しく侵蝕を受けて準平原に近づいた時、伊勢海と近江盆地とが陷沒して形成さ

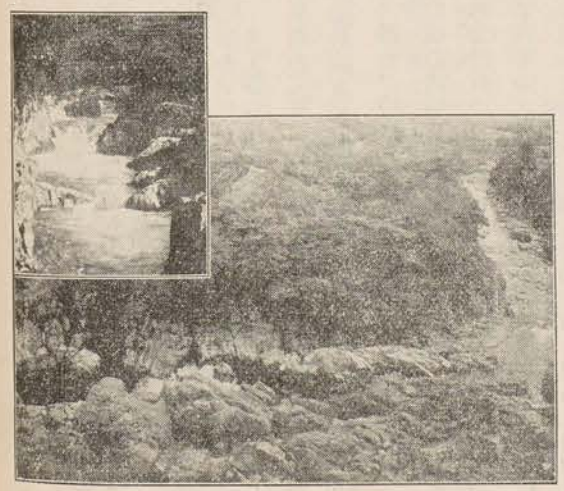
れた地塁であるから、本村は六〇〇——八〇〇米の高度を有する山地である。最近土地の隆起に伴ひ、犬上川の下刻甚だしく上流部は峡谷を作つてゐる。

本村と脇ヶ畑とに跨る陣屋山は、六八〇米の高地にして、其の中腹は北川の谷に向つて急に傾斜してゐるが、頂上は概して平坦で高低の差六〇米に達しない臺地狀になつてゐる。此の附近から北方、坂田郡伊吹村に亘る一帶は所謂近江カルストである。陣屋山の臺地面には陥没によつて作られた大小十數個のドリネ（Doline）が散在してゐる。此エリ」と云ふが、或は「抜け入り」の轉訛ではないかと思はれる。ドリネの直徑は一〇——一〇〇米の間で、何れも底に沃土が廣く堆積し、一部には石灰岩の岩塊があつて、穴が地中に通じてゐる。此の底の沃地では大根・牛蒡・蕾等が栽培されてゐる。「新ニエリ」は長徑二、四米、短徑一、七米、深さ三、六米の小さなドリネで大正六年春陥没によつて生じたものである。大字佐目の北川の左岸には稍大きな石灰洞がある。入口の廣さ約五米、高さ約三米、奥行約六〇米ある。其の中には鐘乳石や石筍及び石柱が多い。犬上川の水は急に涸れ、伏流水となり、又下流に現はれるのは川底の地下にある空洞を辿るので、これカルスト地方に見る現象である。

カルスト 石灰岩から成る地方では、炭酸を含んだ水が石灰岩を溶蝕して、ドリネ・カレン（Karren）・石灰洞臺地等特有な地形を作る。かゝる地形を總稱してカルスト地形（Karst Topography）といふ。

ユーゴースラヴィア（Yugoslavia）の西北部のカルストと云ふ地方に特に發達してゐるから、其の名に因んで斯樣な地形をカルストと稱することになつた。我が國では山口縣秋吉臺のカルストは最も名高く、我が近江カルストも亦世に知られてゐる。

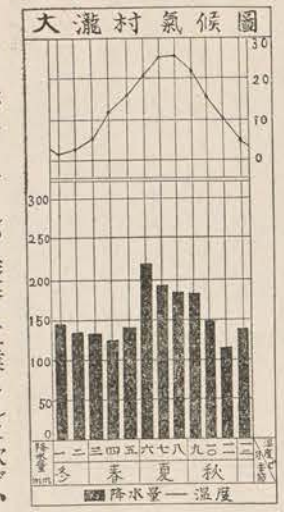
犬上川は村の南境に源を發し、萱原・樋田・佛ヶ後・一ノ瀬等の諸部落を



犬上川の峡流

經て、大君ヶ畑・佐目・霜ヶ原・小原等の諸部落を流れる支流北川を川相に於て合せ、藤瀬・富之尾・楢崎を經て西流してゐる。其の間幾多の狹隘の山谷を過ぎ、岩石到る所に突出し、流が急で富之尾の上流に瀧をつくつてゐる。水量少く、且つ急流であるから水運の便なく、又川床が低くて、灌漑に利用することは頗る不便で恩惠を受ける所が少い。今尚人工に依つて灌漑に利用する迄には進まない。

川畔の所々には肥沃な平地が開けて、乾田として開拓され、山麓又は斜面は畑として農耕が行はれてゐる。上流に沿ふ地方は山ばかりで平地少く、下流の富之尾附近には稍廣い平地が發達してゐる。



氣候 氣温は概して温和であるが湖岸を遠ざかつてゐる爲、氣温の較差は稍甚だしい。年平均氣温は一四・一度であるが、最高は八月の二六度で、最低は一月の一・九度である。山地では土地が高いから雨量多く、年雨量は一九六一・六粍に達し、最多雨は六月の二二二・二粍で最少雨は一一月の一一五・〇粍である。夏は西又は南風が多く、冬は北西又は北風が主となつてゐる。

二、人文

産業 林業を主とし、農業・工業これに次ぎ、水産業も亦行はれてゐる。

1 林業 大部分が山地であるから、林業は本村の最も重要な産業である。夏氣温高く、雨量が多い爲、森林よく繁茂し、松・杉・檜等の良材の産が多い。村民は樹木の伐採に從事し、川相・大杉に製材所を設けて盛んに製材してゐる。板及び其の他の建築用材として製材したもの、又は製材しない材木も年々多く移出される。雜木林も多いので炭を燒き薪と共に他町村に販賣されてゐる。大字富之尾には、大瀧外五ヶ村の山林組合がある。

2 農業 林業に次いで主なる産業で、川岸に沿ふてゐる平地を利用し、幼年期の谷であるから川底が非常に低く、小規模の灌漑に適しないから溜池を設けて灌漑を行ひ、山麓斜面も畑として巧に利用されてゐる。米・麥・蕾・野菜等を産し、米は年産

額二九九九石、麥は二五〇石にして、村民の食用に供し、釀造原料として消費して猶過剩の米は毎年産額の五分の一を他町村へ移出してゐる。畑には桑を作り養蠶を行ひ、毎年約七三五九貫内外の繭を産する。

3工業　犬上川の沿岸は水質が優良であるから釀造に適し、富之尾・川相・佐目にて酒・醬油の釀造が行はれる。其の他鍬・鋤等農具が霜ケ原・小原等に於て製造される外、見るべき工業は行はれない。

4水産業　川相と富之尾の上流瀧間に於て、極く小規模の養漁場が設けられ鮎・鯉・鮒等が養殖されてゐる。毎年七月中旬から九月下旬迄の間に於ける漁期には鮎・鯉・鮒等が漁獲されるが、年産額は二六八二圓内外に過ぎない。夏季瀧の下流に多くの漁客が集り、一日の遊樂に耽る。

交通　1道路　川相から尺佛を經て富之尾に通ずる縣道は、長さ四粁にして東甲良村に通じ、最も重要な交通路である。佐目から梨ノ木峠を經て多賀村に通ずる縣道は延長約四粁にして、前者と共に本村に於ける二大交通路となつてゐる。富之尾より霜ケ原を經て、佐目の西方で縣道に合する村道は二大幹線を連絡する重要なるものである。萱原より樋田を經て川相に通ずる村道は、大杉より來る村道と古堂橋に於て相會する。小原及び一ノ瀬よりも各々短距離の村道を川相に通じてゐるから、同地は本村交通の中樞で、富之尾は村の門戸に當つてゐる。佐目より大君ケ畑へは荷車を通じない道路を以て連絡し、其の他霜ケ原から小原、佐目から南後谷、藤瀬から尺佛、楢崎から東甲良村、藤瀬から愛知郡秦川村、及び一ノ瀬から佛ケ後を經て遙か南方に通ずる幅員半間以上の道路は主要なものである。村内の道路は縣道を始め、何れも川畔の平地又は溪谷の底地を利用してゐることは、地形と交通との關係を明にする所である。

2自動車交通　高宮町日の丸自動車商會の經營にかゝる乘合自動車は富之尾・河瀬驛間を往來してゐる。

通信　川相に郵便局を置き、要地には一日に二回配達される。電報は横關局から配達し、電話は多賀郵便局より富之尾山林組合・川相郵便局に通じてゐる。

人口　昭和四年度の國勢調査に依れば、人口は男子一六一二人、女子一五四四人で、總數計三一五六人にして其中現在世帶數は七五二である。大正十四年調査の三、一三三人、大正九年の三、二四九人に比較するに著しい增減を認めない。

面積大なるに比し、人口は少數であるから、密度は頗る小にして、一方粁僅に四一人の割合である。而して分布狀況を見るに、犬上川兩岸の平地及び其の支流の溪谷の底地に居住するのみで、廣い面積を占める山地には人煙を見る事は出來ない。最も密な部分は西部で、富之尾・川相地方である。

聚落の形狀は、地形上から見れば散村又は鏈村形式を示す筈であるが、近江盆地の特色である集村形式に發達してゐる。

教育　川相に尋常高等小學校を設け、富之尾・佐目・萱原・大君ケ畑には夫々尋常小學校を置いてある。學區を定めて兒童を通學せしめ、現在就學兒童數は五百餘名である。

教員は本科正教員男七人、女一人、專科正教員男一人、准教員男二人、女二人、代用教員男二人、女五人、計二十人の教員がある。

されば教育費總額は實に三二、三四一圓に上り、村費の〇、五六に達し、村民これが負擔に苦しむやうになつた。玆に近年小學校併合の議が識者によつて唱へられてゐるが、兒童の通學困難を叫ぶ一部の說もあつて今尙實現されない。

其の他富之尾・佐目に實業補習學校を併置し、川相尋常高等小學校に青年訓練所を設けて青年子女の教育を行つてゐる。

瀧神社　1神社　大瀧神社

大字富之尾に在つて、神域三六六〇坪、社格は鄕社である。高靈神（タカオーカミ）・闇靈神（カミボー）の二神を祭神として祀り、毎年五月五日に大祭が行はれる。

由緒略記に「創立年代不詳なりと雖も淡海落穗集に、大瀧三社の御舘野の禮處は大同二年坂上田村麿將軍の御願にて建立云々とあり。案ずるに大同二年以前の建立なること明瞭なり。今も俗稱御舘野と呼ぶ處あり。其後寛永癸卯年德川家より修覆有之。現今に至る祭神の御神德は濕雨を司り水脈を主宰し、農作物の生茂繁殖の道を幇助し給ふ大神矣」とある。

本社は明治九年十月村社に列し、同十四年十二月二日鄕社に昇格されたのである。

尙境内神社としては、大雷命・大山祇命の二神を合せ祀る大雷神社（向つて左）、稻依別王命を祀る犬上神社（向つて右）の二社がある。

本社は犬上川の上流に沿ひ幽邃絕塵の地に位し、山高く、水淸く、怪岩・奇石水中に突出・起伏し、淸流之に懸つて急湍は白沫を飛ばし、天然の風致に富んでゐる。故に毎年五月頃より十月頃迄、遠近の雅客此の地に杖を曳き、本社に參拜する者が絕ゑない。斯の如く本社は天然の勝地にあり。且由緖深い神社であるから大正八年本村有志相謀つて、瀧之宮保勝會を設立した。

村内には其の他十四の無格社がある。

2 寺院　眞宗と臨濟宗のみで、殊に眞宗に屬するもの最も多く村内十五寺の多きに達し、臨濟宗に屬するものは七寺ある。其の中瑞光寺・高源寺等は最も著名である。

瑞光寺は大字富之尾にあつて富尾山瑞光寺と稱する。行基菩薩が聖武天皇の勅命を奉じて、創建したもので、初長福寺と稱し、法相宗に屬してゐた。鎌倉時代に禪宗の盛になると共に臨濟宗妙心寺派に轉宗し、寛文年中瑞光寺と改名された。本尊は木中地藏尊である。

木中地藏尊は高さ五尺餘で、其の名は一大木を以て三體の地藏尊を造つたので、これ等を木の本、木の中、木の末地藏尊と云ふことになつたと傳へられてゐる。

木中地藏尊の靈驗あらたなことは夙に世に知られ、建久年間源頼朝が病に罹つた時、此地藏尊に祈願し、其の後數日にして全快した。それから當寺へ參詣の沙汰があつて、經文を納め、田・畑・山林等を寄進し伽藍も再建されたのである。

後柏原天皇永承二年に兵亂大に起り、當國の名藍淨刹多く兵火に罹つて燒失した。當院も亦其の災厄にかゝり、荒廢に歸した。翌三年秋、富尾又太郎・富田兵庫之亮・同彦九郎等が心を合せて本堂を造營し、十月廿一日安座式の供養を終つた。

其後寛文年中寺號長福寺を瑞光寺と改名したと傳へられてゐる。

財政　昭和四年度の歲入出豫算は五九、八三七圓に上つてゐる。歲入の主なるものは、村稅・財産收入・使用料並に手數料・雜收入・前年度繰越金・其の他である。歲出の主なるものは、役場費・會議費・土木費・敎育費・衛生費・救助費・其の他である。歲出の中で敎育費が〇、五六に達する事は他町村に類例少く、大いに注意すべき所である。

昭和四年度歲入出

歲入		歲出	
村税	二四、三三八圓	役場費	七、〇三一圓
財産收入	九五、二圓	會議費	一九五圓
使用料並ニ手數料	一二三圓	土木費	一二三圓
雜收入	六、三七七圓	敎育費	三二、三四一圓
前年度繰越金	五、二九一圓	衛生費	五圓
其の他	二二、七五六圓	救助費	四七圓
合計	五九、八三七圓	其の他	一九、九六六圓
		合計	五九、六九〇圓

沿革　本村には沿革史とては何もない。唯古より傳へ來る所に依れば、昔本村を穗無之莊と呼び、其の頃は大部分が山地で、田畑と云つては殆んどなく、隨つて米・麥・粟等の穗がなかつたと云はれてゐる。其の後文化の進歩と人口の增加とに伴つて漸次開拓が行はれて、田園も廣くなつた。

明治の初、其の穗無之莊に富之尾・川相等八村が各々別々に村と稱してゐたが、明治二十三年に至つて町村制が布かれると共に此等八村を合併して一村とし大瀧村と命名した。蓋し大瀧神社に因んだものであらう。

口碑傳說　土俗相傳に昔一獵夫があつた。或日、其の獵夫が彼の愛犬を携へて、千鳥岡鳥籠山に獵に出かけた。獵夫は愛犬を倦に〳〵と眠り始めた。偶此の溪谷の淵に住める大蛇が鎌首を上げて、今にも獵夫を襲ひ立てた。獵夫が眠らんと欲すれば、其の犬は自己の粗忽を悔ひ其の忠死に深く感じ祠を立てゝ之を祀つた。境内の東方に其の忠犬の胴を埋め、其の上に大蛇と共に斃死した。茲に獵夫は自己の粗忽を悔ひ其の忠死に深く感じ祠を立てゝ之を祀つた。境内の東方に其の忠犬の胴を埋め、其の上に松を植えて犬胴松と稱し他人は永く其の忠死を賞讃してゐる。

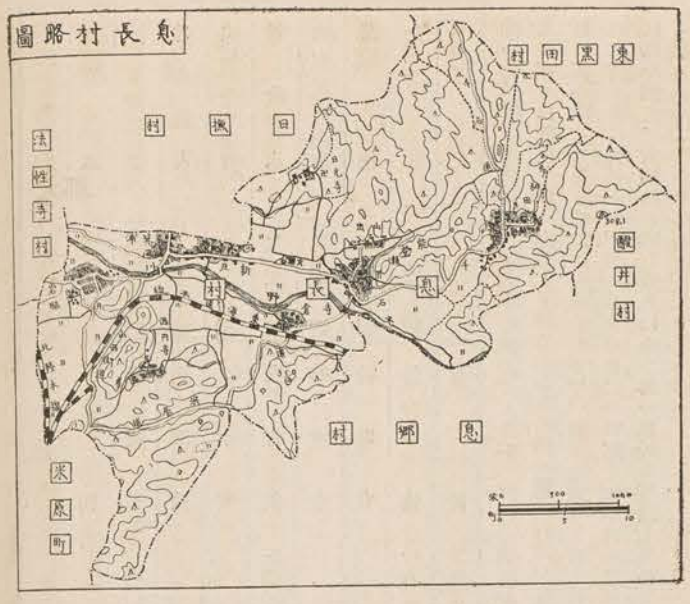
置いて川邊の木陰に腰を下ろして休んでゐたが、何時の間にかうと〳〵と眠り始めた。偶此の溪谷の淵に住める大蛇が鎌首を上げて、今にも獵夫を襲ひ立てた。獵夫が眠らんと欲すれば、其の獵夫に危害を加へんとした。これを見た例の愛犬は大いに驚き主人に危急を告げんと欲して頻りに吠え立てた。獵夫が眠らんと欲すれば、更に衣を嚙んで曳き盛んに咆哮したので、獵夫は怒つて劍を拔いて犬の頭を切つた。其の頭は忽ち高く飛び上り、樹上の大蛇の喉を嚙み、竟に大蛇と共に斃死した。茲に獵夫は自己の粗忽を悔ひ其の忠死に深く感じ祠を立てゝ之を祀つた。境内の東方に其の忠犬の胴を埋め、其の上に松を植えて犬胴松と稱し他人は永く其の忠死を賞讃してゐる。

坂田郡

息長村誌

塚田英夫

一、地文



位置　坂田郡の略中央天野川（一名息長川）の流域に位す。東は醒ケ井・東黒田兩村に堺し、西は米原町・法性寺・日撫村に接し南は息郷村・米原町に隣り。北は東黒田・日撫村に堺す。面積は一〇、八方粁にして、八大字に分たる。

大字　岩脇・西圓寺・箕浦・新庄・寺倉・能登瀬・日光寺・多和田に分たる。

地勢　北・東・南の三方に山を繞らし僅に西南部のみ平野開く。山地は何れも古生層より成り中央の平地には第四紀古層發達す。山地は多く二〇〇米内外であるが、東方醒ケ井村の境には三〇八米の高地聳ゆ。概して土地廣く平地は比較的狹少にして、主として天野川沿岸に見る。されば森林には良材を多く產し松茸の產亦少からず。天野川は柏原村（柏原菖蒲ヶ池）より源を發して、北に流れ、急に迂廻して西南に向ひ丹生川を合せ、西流して湖東平野の一部を潤し琵琶湖に注ぐ。長さ約二〇粁、水量多く、水清くして灌漑の便に富み、漁利あり。支流菜種川は息郷村番場より發し、西圓寺にて本流に合し、日光寺川

は本村日光寺より發し新庄にて會し、和佐川は息郷村西坂より出で寺倉にて合す。これ等支流は皆灌漑に利用せらる。村の東南に息長・息郷兩村に跨る寺倉山（一名總寧寺山）あり。

氣候　本村は三方山に圍まれ、西方のみ僅に琵琶湖に面するを以て氣溫調節せられ、氣候は頗る溫和なり。年平均氣溫一三・六度にして最高は八月の二六・四度、最低は一月の二度なり。年雨量は一六二六・七粍にして最多雨は九月の一九五・五粍、最少雨は一一月の九八・四粍なりとす。毎年十二月より三月迄の間降雪を見る。夏は東風及び南風多く、冬は北西風及び北風發達す。周圍に山を繞らす爲暴風の害を受くること殆んどなし。

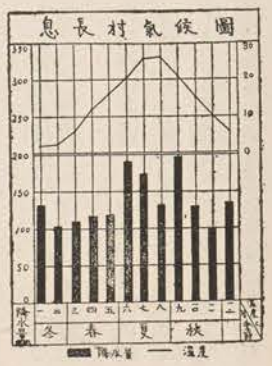
二、人文

產業　農業を主要產業とし、其の副業盛んにして、又林業・水產業・工業等行はる。

1 農業　天野川沿岸には肥沃なる平野開け、灌漑の便あるを以て米作に適し、年產額七、〇六二石、其の價値一二三、八〇二圓に達す。江洲米として古來其の名高く、村內の需要を充し、剩餘の米穀は各地に移出さる。二毛作行はれ、能登瀬・新庄・箕浦地方より麥を產し、產額一〇一石、價格は一、三〇〇圓とす。新庄を中心として、紫雲英の產多く總量一四三、八二〇貫に達し、新庄種の名殊に高く年產額一二五石、其の價格三、一二五圓なり。近年山陽・山陰地方に販路を開き有望なる產物となれり。西瓜は西圓寺・寺倉・箕浦・能登瀬等に多く產出す。柿は本村の特產にして產額頗る多く、殊に日光寺の干柿は廣く他府縣に移出せられ、年產額三、九〇〇貫、其の價格一、五六〇圓に達す。

農家の副業として養蠶行はれ多和田・岩脇・能登瀬は著名なる產地にして、年產額三、二三三貫、其の價格は一六、七一二圓なり。箕浦には養雞組合を設置し、又鷄卵販賣所・鷄餌販賣所の規模大なるものあり。其の他筵は新庄・日光寺等より多く產し、年額七、四三八枚、價格一、八六〇圓なり。

2 林業　森林は何れも松林にして、杉・檜の類は少く、雜木亦稀なり。松の良材多く、能登瀬にて製材し、各地に移出さる。



西圓寺・寺倉・新庄等には松茸の産多く他府縣に送出す。山麓又は川岸に竹籔ありて竹材を出し、籠細工を造る。

3 水産業　天野川には鮎・鱒等の漁獲多し。鮎は毎年五月より八月頃迄の間簗を設けてこれを漁獲す。天野川の鱒は其の名遠近に高く、其の他鯉・鮒・鰌・鰻等の漁獲も亦多し。漁獲總額は一、二七二圓なり。

4 工業　綿蚊帳の製造は箕浦を中心として盛に行はれ、京都・名古屋・大阪地方に販路を有す。年産額三〇、四〇三反、價格一三二、三六九圓なり。

ヴェルヴェットの産亦多く、其の年産額は四四、八二五碼にして價格は四二、五八四圓なり。

5 商業　本村は農業を主要産業となすを以て、商業は振はざれども、1 地方の特産たる蚊帳・ヴェルヴェットの産多く、2 近江商人の遺風を受け、各地に行商するもの多し。これ等の産地たる箕浦より毎年廣く各地に行商す。

交通　1 道路　縣道は米原道・千石道・息長街道・山西街道の四路線なり。米原道は山西街道より分れて村の西南隅を弦月形に東に通じ、息郷村番場に於て中仙道に連絡す。千石道は西圓寺に於て米原街道より分れ、寺倉・能登瀬・多和田を經て西南より東北に縦貫して、東黒田村に通ず。息長街道は法性寺村に於て北國街道より分岐し、箕浦・新庄・能登瀬を經て千石道に連絡され山西街道は米原より箕浦を經て日撫村に通ずるものなり。

前記の四大縣道の外これ等相互間を連絡し、各大字を結ぶ重要なる村道、及び他村に通ずる主要なる村道は、何れも一間乃至一間半の幅員を有す。

2 自動車　乘合自動車の交通は未だ幼稚にして、僅に鳥居本村より長濱に通ずるものが、本村の西部を通ずるのみ。貨物自動車は醒ヶ井より長濱に通じ、本村を東西に横斷す。村内の縣道は何れも幅員二間以上を有し、自動車の往來に適するを以て、法性寺村大字宇加野より日撫村大字顔戸・本村箕浦・新庄・能登瀬を經て多和田に通ずべきもの目下認可出願中なり。

3 鐵道　本村は鐵道沿線なるも村内に停車場なく、甚だ不便を感ず。されば西部よりは米原に、東部よりは醒ヶ井驛に依る。

通信　大字能登瀬に息長郵便局あり。明治四十年頃無集配局として設置せられしが、昭和四年新に電話・電報事務を掌ることゝなり、特設電話開通し、通信上面目を一新するに至れり。然れども郵便物の集配電報配達は米原局にて取扱ふ。郵便箱は各

大字に一個又は二個を設け、集配は一日に二回とす。

人口　人口總數は昭和四年の國勢調査によれば、三、六七三人にして、内男子は一、七八六人、女子は一、八八七人なり。人口密度は西部の平地最も大にして箕浦の一方粁に付一、一一一人を第一とし、新庄の七〇〇人これに次ぐ。南部山地は最も小にして、西圓寺の一一六人を最小とし、寺倉の一八〇人これに次ぐ。多和田・能登瀬・岩脇等は其の中間に在り。

聚落は何れも集村形式に發達し、西圓寺・寺倉等の山地に於ても散村・鏈村等の形式を見ざるなり。

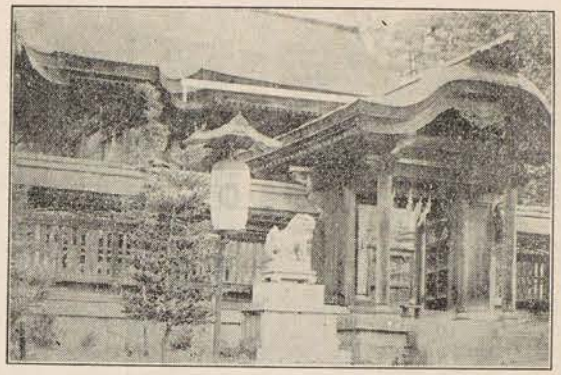
各大字人口密度

大字	密度（一方粁につき）	大字	密度（一方粁につき）
多和田	六〇五	箕浦	一一一一
能登瀬	四四三	新庄	七〇〇
寺倉	一八〇	日光寺	三九八
岩脇	五三〇	平均	五一〇
西圓寺	一一六		

教育　明治四十四年四月息長尋常高等小學校を箕浦より能登瀬に移轉改築せり。校舍は三棟にして巾七間、長さ十四間の講堂あり、特別教室としては、理科室・唱歌室・手工室・應接室・賣店等有り。學級は男子八學級・女子七學級計十五學級・兒童數は六百二十一人にして、職員數は十七人なり。實業補習學校・(明治三十八年九月)・青年訓練所を併置して青年子女の教養に努め居れり。

沿革　明治八年箕浦・新庄二個村にて箕浦村に習化學校、岩脇村に岩脇學校、西圓寺村・寺倉村組合にて西圓寺村に旭明學校、能登瀬村・日光寺村組合にて能登瀬村に篤好學校、顔戸村・高溝村・舟崎村組合にて顔戸村に日撫學校を置く。然るに明治十年四月西圓寺村なる旭明學校を廢し、寺倉村は樋口に設置せる修德學校に、西圓寺村は箕浦村なる習化學校に編入され同年十月岩脇村なる岩脇學校も亦習化學校に編入せらる。十一年篤好學校組合なる日光寺村も習化學校に編入され、爾來十九年十月三十一日迄は習化・篤好・日撫の三校ありて村内の子弟に小學校全科の課程を授く。十九年勅令第十號に基き、縣令第十六號を以て小學校設置區域を定められ、同年十一月一日岩脇・箕浦・新庄・西圓寺・日光寺・寺倉・能登瀬・顔戸・高溝・舟崎の十村にて箕浦村に尋常科息長小學校及び簡易科息長小學校の二校を設置す。然るに簡易科息長小學校は就學生漸く減少せしかば二十二年八月之を廢せり。二十六年一月二十一日息長村大字箕浦・岩脇・西圓寺・寺倉・能登瀬・日光寺新庄の七大字を以て、村立息長尋常小學校を大字箕浦に設置し、同年十二月一日より高等科（修業年限三ヶ年）を併置し息長尋常高等小學校と稱す。三十年四月高等科の修業年限を四ヶ年とし、同年十月裁縫專修科を加設し、三十五年四月裁縫專修科を附設裁縫學校と改稱し、三十

八年九月二日實業補習學校を附設す。四十四年七月息長尋常高等小學校を箕浦より能登瀬に移轉改築し、更に大正十三年校舍の東方に講堂を新築し、同十五年前庭中に奉安殿を建設す。



山津照神社

社寺 1 神社 山津照神社は能登瀬に鎮座し、社格は縣社なり。國常立尊を祀り、毎年四月五日に大祭を行ふ。由緒深き神社にして、氏子多く、明治十四年鄕社に列し、後縣社に昇格す。境内に息長宿禰の墳墓なりと傳ふるものあり。

由緒沿革 中古青木大梵天王又は青木大明神と稱へ俗に青木の宮と云ふ。この青木の名は鎮座の地青木の里に因みしものならん。扶桑累記に淸和天皇貞觀八年閏三月壬午、從四位上山津照神社位記請印の事見えたれば屢々叙位の沙汰ありしこと明なり。延喜式内坂田郡五座の一に列す。曆應二年十月四日光嚴上皇院宣を下して神殿を修造し、天下泰平を祈り給へり。社坊を平尾山善性寺と稱す。古は近鄕二十六ケ村の氏神たりしが、文化年間に醒ケ井村離社し、又明治初年岩脇・多和田・飯村の三村離社して、今は能登瀬の外日光寺・新庄・箕浦・米原・西圓寺・寺倉・番場・西坂・三吉・樋口・牛打・枝折・上丹生・下丹生・榑ケ畑・武奈・明辛の各大字となる。明治十四年二月一日鄕社に列し、後縣社に昇格し、二十七年八月內務省より保存金百五十圓を下附せらる。寶物に神功皇后の征韓の役に用ひ給ひし鉞なりと傳ふるものあり。

大寳神社は大字多和田に鎮座し、社格は村社なり。素盞嗚尊を祭神として祀る。大寳年中勸請せしを以て社名は其の年號より來起せるものなりと云ふ。近江輿地誌畧には祭禮四月五日と記し、淡海木間攫には祭禮七月二十日と見ゆ。蓋し春秋兩祭を別記せしものならん。明治十四年六月二十五日村社に列す。現今は四月二十五日に大祭を行ふ。

稻荷神社は大字岩脇に鎭座し、宇賀魂神を祭神として祀る。近江輿地誌畧に「稻荷大明神社岩脇村の龍尾山にあり。祭禮毎年四月五日」と見ゆ。享保二年十月十四日神官卜部兼敬が、當社に山城國伏見の稻荷神社の神位正一位の分授を受けたることと文書に存す。

2 寺院 日光寺は大字日光寺にあり。膽吹山寺三修の高足名超童子の開基せし古刹なりと傳ふれば貞觀元年頃創立せられしか。天臺宗成菩提院の末寺にして本尊は木像なり。

七堂伽藍壯觀を極め、醍醐天皇の御代寺領寄附の綸旨を給ひ、後小松天皇の御代僧綱補任の綸旨を給へり。元龜二年兵燹に罹り、諸堂烏有に歸す。後再建して舊觀を復せしが、漸く衰頽して亦昔日の偉觀を見る能はず。

寳福寺は大字箕浦にありて、開基詳ならず。初め天臺宗に屬し誓願寺と稱せしが、僧行祐覺如上人の時眞宗に轉宗す。本尊は蓮如上人なり。

上人諸國巡錫の砌、隨從布教に盡す。故を以て自畫自讃の御影並に正信偈文八句二軸の染筆を授けらる。元和元年大阪落城の時豊臣方の浪士を穩匿せし罪により斷滅せしめ、河內の國大井村に移さる。其の時一族法音なるもの當地に止まり、後里人と協力して草堂を結びしが、元祿十年寂如法主より箕浦村惣道場正源寺と許され、後正德二年六月二十日寳福寺と改號允許あり。同年より毎年本山にて執行さるゝ祖師報恩講並に蓮如上人正忌日の兩度非時の御頭を申附けらるゝ例となれり。

善性寺は大字能登瀬にありて、延喜年間の創立にかゝる。天臺宗にして山津照神社の別當として、本願坊と稱す。後眞宗佛光寺派に轉宗し、善性寺と改む。

當寺が山津照神社の社坊となりし年代は詳ならずと雖も、曆應二年光嚴上皇の院宣に明かに本願上人御坊と記されたれば其の年代の古きを察し得べし。朝庭及び貴族の崇敬厚く益々隆運に向ひ寺格高く、終に近衞家・綾小路家等の猶子となり、明治四年迄祈禱札を献納するを例とせり。

西圓寺は大字西圓寺にありて、大雄山と號す。開基詳ならざれども創建頗る古きものなりと傳ふ。初め天臺宗に屬せしが、元祿の頃桂崖和尙臨濟宗に轉宗す。

永德二年十一月足利義滿當寺を祈願所となし、應永十七年十一月更に祈願所の故を以て、寺領安堵を沙汰す。長錄三年十二月足利滿政當寺々領に臨時の課役段錢等を免ず。元龜・天正の間屢々兵燹に罹り堂塔伽藍什器悉く灰燼に歸し、廢墟となる慶長年間光山玄明舊址に一寺を建立す。これ現に存するものなり。

沿革　明治二十一年四月市制村制の設置せらるゝに當り、能登瀬村・多和田村・寺倉村・西圓寺村・岩脇村・箕浦村・新庄村日光寺村を合して北箕浦村と稱し、息郷村を坂田郡南箕浦村と云ふことに内定せしが本村は往古より「おきな」村の稱ありし故を以て、俄に議を變じ息長村と稱し、南箕浦村を息郷村と呼ぶことゝなれり。

大字の起因　名稱は何れも古く、古歌に多く現れたり。

1能登瀬　萬葉集に能登川の歌見ゆ非常に古き地名なり。一に青木の里と稱す青木は「あふき」にして仰ぎの意なり。

萬葉集　さゞ涙やいそこぢなる能登瀬川、音のさやけき瀧つせ毎に。　波多小足

2多和田　名稱の起因詳ならざれども、多和田とは萬葉形の名稱にして古くより此の名あり。

3新庄　新庄氏の領地なればその名に因めるものなり。

4日光寺　天台宗の巨刹日光寺ありしにより、その名による。一に尾鼻とも云ふ。

5西圓寺　古への西圓寺の所在なれば寺名を以て地名となしたるものなり。

6岩脇　有名なる岩屋善光寺と稱する巨岩に佛像彫刻せられ、滿山岩より成る。其の側に聚落發達せしかば其の名起る。

7箕浦　箕浦は鎌倉時代より特に著明となりし地にして、將軍の上洛・下向等に箕浦宿り或は畫箕浦等の語吾妻鏡に見ゆ。上古の息長の莊は遂に箕浦の莊と改められたり。その地名は箕浦氏が治めし爲起れりと云へどもこれ全く轉倒したるものにして、山本義明が此の地を治めて箕浦氏と改めしなり。保元物語には「簑浦」と記し、古くは「水の浦」或は「見の浦」と記す。それ湖邊にありし地なるを以てかく云へるなり。

8寺倉　奈良時代には本郡内に大寺院の領地多く、又當時庄倉を置き、領地より上納する米穀を藏せしにより、寺倉の名起る。

附說　1箕浦城　息長村大字新庄にありし箕浦城は箕浦の莊の領主今井氏の本城なり。新庄にあるを以て新庄氏の領地なりと傳ふれども、これ誤なるべし。新庄氏は今井氏より出で、朝妻城に治す。今井氏は京極家の根本被官家にして、本郡南部の重鎭なり其の城趾今小字名を城の内と云ひ其の南を的場と云ふ。

2能登瀬の古墳　大字能登瀬式内山津照神社の境内にあり。明治十五年同神社の社殿移轉の際、門路を擴げんため岡山と稱する瓢形の高地を整理する時巨石を發堀せり。これ羨道入口の蓋石にして土人驚きて廓内に入りしに、種々の副葬品は整然として其の窟中に羅列されたれば、直に警察署に届出て、猶遺物の一部を發堀せり。官吏臨檢して元の如く埋めしめしが發堀せし遺物の中重なるものを内務省に送る。一年余にして内務省は届出でし品目全部を却下して長く山津照神社の神庫に納めしむ。古鏡三面（二面は獸鏡、一面は五鈴鏡）、直刀十數振、刀子三個、土器類には聽・大高坏・蓋坏・提瓶・坩等多數にて、金銅の天冠らしき物の破片數個、馬具には俗に朝鮮鐙と稱する古代鐙轡二個、杏葉、雲珠、鞍橋の

鏡鈴五と宣院の院嚴光

覆輪らしきもの二個、三輪玉五個なり。而して其の土器類の形は他の古墳發堀物に比して總て、二倍大にして其の樣式も尋常古墳に見ざる所なり。猶古墳發見の當時官は直に墳口を埋めしめたれば他の副葬品を始め墳墓の構造を詳にするを得ざれども其の事に當りし人の言を聞くに墳口は南面にして羨道の巾一米餘、高さ一・五米、奥行約三米にして玄室に入る。玄室の巾二・八米、奥行四・五米高さ二米、蓋は三大石を以てす。玄室の奥に一段高き所ありこれ石棺と見るべく、前記の副葬品は其の周圍に配置され、室の東方に四個、西方に四個大なる土器裝置されたり。玉類は見當らざりしも、隅なく探さば發見し得べし。其の他土中より埴輪・圓筒の破片出づ。本郡中古墳多しと雖も、副葬品の大なると埴輪を埋藏せしは此の古墳のみなり。此の地は名族息長氏の居住地にして、奈良時代息長眞人が朝廷の要路に立ちたること史上に明なり。此の古墳は一見貴人のものにあらざるべく、且つ發堀物等より案ずるに奈良以前のものらしく、傳說には神功皇后の御生父息長宿禰の墳墓なりと傳ふ。目下宮内省にて調査中に屬す。

3塚の腰古墳　大字新庄塚の腰にあり瓢形古墳の侵蝕せられしものならんか。古へより口碑に元旦の曉黃金の雞鳴くと傳へらる。其の古墳は朝日照り夕日も輝く好位地にあり。明治十八年好奇心に驅られたる人ありて、一夜窃かに金雞を占めんと此の古墳墓を發堀す。地主暴狀あるを聞き之を見たるに、土中に金環・勾玉・管玉等散見したれば拾ひ來りて保存す。明治二十四年臨時全國寶物取調局より九鬼隆一氏等の一行本郡に來りし時之を見て鑑査狀を下されたり。

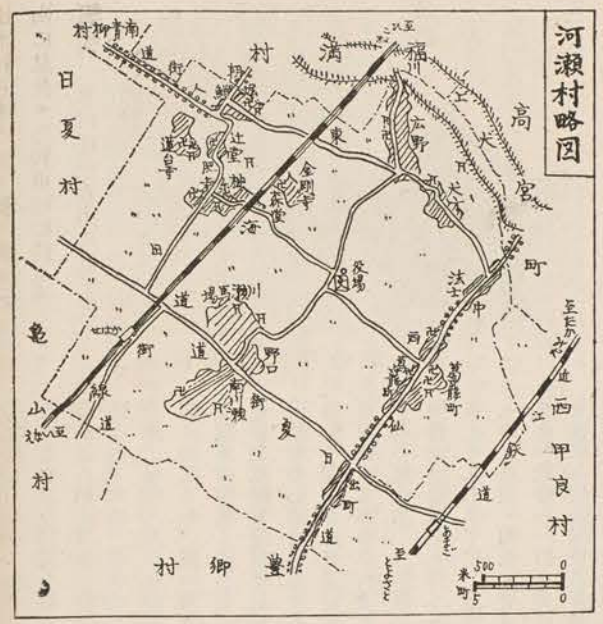
4征韓の役に用ひたる鉞　鐵製にして重量五斤三〇兩、一部に金飾を施し、象嵌樣の模樣あり。長さ四尺二寸五分、徑一寸にして、頭に斧形刄樣のものを附す。其の長さ四寸五分、幅は本にて八分、末にて三寸二分、後方に鶴嘴形（長さ三寸七分）の釣出づ。柄の中に一劒を藏し、柄を執りて振れば忽ち三尺五分の鋭刄現れ、指にて後方の孔を押せば劒は直ちに柄中に藏まる。誠に珍奇なる武器と云ふべし。

犬上郡

河瀬村誌

三橋文男

一、地文


河瀬村略図
日夏村
亀山村
豊郷村
高宮町
西甲良村
法士
福満村
南青柳村
至彦根
至長浜
至愛知川
至八日市
至多賀
至犬上
至甲良
至豊郷
至高宮

れ、若林籐細工場・野村工場・澤村工場・水上籐工場の五工場がある。明治卅年頃までは内地向の物を多く製造したが、其の後漸次擴張して、輸出向の製品多く、米國を主なる顧客とし、内地向の品は多く彦根地方にて販賣されてゐる。本村の籐細工は水口町の藤細工と共に本縣の特産物である。

交通 中仙道（國道）は豊郷村より來り、本村大字出町・葛籠町・犬方を經て川を渡り、高宮町に通じ、朝鮮人街道（國道）は福滿村大字宇尾より來り本村大字堀・蓮臺寺を經て、日夏村に入る。日夏街道（縣道）は日夏村より來り、川瀬馬場・野口を經て西甲良村に通じ、肥田街道（村道）は本村大字堀にて朝鮮人街道より分れ、大字辻堂・極樂寺を經て日夏街道に連絡する

東海道線は西部を北東より南西に通じ、河瀬驛を置き、近江鐵道は東部を走り、西甲良村の尼子驛が近い。

乘合自動車は河瀬停車場より日夏街道を通つて西日夏村に到るものと、同停車場より同じく日夏街道を通じ西甲良村大字尼子に到り、東西の鐵道を連絡してゐる。

通信 郵便物は高宮郵便局の集配に屬し、郵便函は南川瀬・葛籠町・極樂寺・犬方・堀の五ヶ所にある。

電信は河瀬驛にて公衆電信を取扱ひ、高宮・日夏郵便局で電信事務を取扱つてゐる。

電話は高宮區内に屬し河瀬村役場に於て呼出電話も取扱はれてゐる。

人口 人口總數は昭和四年の國勢調査によれば、四九一四人にして、内男子は二二一七人、女子は二六九七人である。女子が男子より比較的多いのは、工場があるのと、本縣一般に女子が男子より多い傾向がある爲とである。人口密度は犬方其の他廣野・南川瀬地方が比較的大である。

聚落の形狀としては犬方の東部、葛籠町・西葛籠町・出町は中仙道に沿つてゐる爲街村形式に近いが、其の他は概して近江盆地に多い集村形式である。

教育 明治維新以後教育は漸次普及發達して、小學校の設立を見るやうになつた。明治二十三年に舊南川瀬小學校の假本校と、國府君（コフノキ）小學校の假分教場とを廢して大字極樂寺に校舍を新築し、此處に移轉した。これ現今の河瀬尋常高等小學校にして同三十年四月高等科を併置した。同三十一年四月假教場を葛籠町に置き、翌三十二年に廢し、同三十七年五月には運動場を擴

張し、四十二年三月には農業試作地を設け、同四十三年五月教室・職員室・講堂及小使室を增築し、更に大正十五年、昭和二年に教室の增築が行はれた。現在職員十七名、兒童數は男女共約八百名を算する。同校に實業補習學校及青年訓練所を併置して子女の補習教育に努めてゐる。

社　神　瀬　河

社寺 1 神社　河瀬神社は川瀬馬場に在つては其の社格は鄕社である。域内六反四畝歩を占め、大己貴神・大山咋神・應神天皇を合せ祀つてある。毎年四月十六日、九月十六日とに春秋の大祭が行はれる。

相殿に祀る應神天皇は川瀬壹岐守が鎭護の神として祀つたものであると傳へられる。社殿は京都の加茂神社の舊殿を文久二年に移築したもので、正面の額に「河瀬神社」とあるは故滋賀縣令籠手田氏の筆である。春季祭には南川瀬・辻堂各年交代にて神輿を奉じ御旅所に至り、同日還御、當日各大字より大太鼓を持寄る習慣がある。

山木戸神社は大字犬方に在つて其の社格は村社、祭神大己貴神・大山咋神・應神天皇を合祀する。毎年四月十六日、九月十六日とに大祭が行はれる。

國府君（コフノキ）神社は犬方にあつて、大己貴神・事代主神を合せ祀り、多賀神社の末社にして、四月二十二日に祭禮が行はれる。

2 寺院　法藏寺は南川瀬にある。延元二〇年四月那須判官源宗高の孫、那須太郎宗政性愚坊の開基にかゝる。眞宗本派本願寺派に屬し、本尊は阿彌陀如來の立像で、其の他寶物が多い。

由緒沿革 永仁二年本山第三位覺如宗主關東巡遊の砌、下野國那須判官源宗高の孫那須太郎宗政の歸依を受け、これを弟子として、性愚坊と命名した。延元二年宗主歸洛の途、性愚坊をして犬上郡安食莊内石畑村字瓜生洋に一宇を建立せしめ、寺號を白鳥山弘誓寺と稱した。然るに文明四年叡山僧徒の跋扈を恐れ、實如宗主の命に依り同郡富之尾村保庄内佐目畑の山中に遷したが、信徒の懇望に因り、翌五年五月更に一宇を建立し、法藏寺と稱へた。然るに河瀬庄川瀨の天台宗獅子吼山遠久寺が屢々兵亂にかゝり荒廢に歸してゐるので、村内小林茂兵衛外信徒の

懇望に由り、更に天正二年八月十五日其の跡へ移轉した。これ今の法藏寺である。

妙德寺は堀にある。初め天臺宗に屬してゐたが、大永年間佐々木善慶（中興の祖）本願寺第九世實如上人に歸依し、眞宗に轉宗した。眞宗本派大谷派に屬し、本尊阿彌陀如來は惠心僧都の作と傳へてゐる。

誓念寺は金剛寺に在る。藤原氏の嫡流北陸の管領青木武藏守時長の後裔青木元淸の開基にかゝる。天臺宗に屬してゐたが、大正十一年眞宗に改宗した。本尊阿彌陀如來は春日佛師の作である。

財政　村勢の發展と共に財政は近年著しく膨張し、昭和六年度に於ける歲出入豫算額は實に二九、九〇〇圓に達する。歲入の主要なるものは、村稅（地租・特別地稅・營業收益稅・家屋稅・營業稅・雜種稅の附加稅及特別稅戶數割）の一九、六〇〇圓及び村有財產より生ずる收入、使用料・手數料交付金・國庫下渡金・縣補助金・寄付金・繰越金等の一〇、三〇〇圓の收入である。歲出は經常部（神社費・會議費・役場費・土木費・敎育費・衞生費及其の他）の二八、三〇〇圓と臨時部（補助費・國勢調査費及其の他）一、六〇〇圓である。

沿革　從前河瀨之莊を十四ケ村とし（或は十二ケ村とした）町村制實施の際、今の十四大字を以て一村としたのは莊の關係上によるものである。又其の地名に寺・堂の稱が多いのは所謂四十九院の跡であつたからであらう。

創作

詩人キーツ（創作）

藤田一一

Bright Star! would I were steadfast as thou art——

輝く星のやうに永しへの命を望んではゐたが、詩人キーツの肉体はもうこの世の生活に堪え得ない迄に傷付き痛められてゐた。彼はその家に傳はつた胸の病氣のために數年以前から苦しめられ、今はもう生きる氣力をさえ失つたかのやうに見えた。彼は死といふことに付いて日夜考へ續けた。そして詩作のペンを置いては、庭の木立をぼんやりと眺めるのであつた。

彼の友人のS、は彼の建康のために彼が暖い伊太利へ行くことを奬めて手紙をよこしてゐた。彼は友のさうした深い情に感動した。けれど彼はその病み衰へた体をもつて遠い伊太利まで行く心にはなれなかつた。彼は毎日自分の書齋に籠つて詩作に惠念した。それが彼の此の世に於ける唯一の慰めなのであつた。

其日も彼は書齋の机に向つてゐた。が彼の筆は少しも運ばなかつた。彼は過去の餘りにも慘めな自分の生活の事を思つて泣いてゐたのであつた。机の上の用紙には涙の落ちた跡さ

へはつきりと見えた。

骨を碎き肉を削ぐやうな思ひをして彼が懸命に作つた詩の多くは餘りにも殘酷に世の批評家達によつて貶されてしまつたのである。彼が詩作によつて此の世に懸けた彼の希望は無雜作に蹂み躙られてしまつた。今はもう灰色の絕望が、砂漠のやうに彼の前に横つてゐるのみであつた。もつと立派な、もつと美しい詩を作りたいといふ念願は彼の心の中に燃えてゐたが、それも今となつては病ひのために打ち碎かれてしまつたのである。青白い死の影が彼の目の前に魍魎のやうに明滅して來るのであつた。彼は兩手を擧げてさうした幻想を追ひ拂はふと努力した。唯一つでもいい、立派な詩を殘して自分は死にたい——それが今の彼の願ひの總てであつた。

彼は頰の涙を拭つて立ち上り窓邊に歩み寄つた。そして瞬時でも心の苦しみを忘れやうとして扉を開き、庭の木立を眺めながら佇んだ。——

丁度其時であつた。誰れか人影が其所に見えた。彼は永い間孤獨の生活を送つてゐたので訪れたその人が誰れであるかは直ぐには分らなかつたが、間もなくそれは懐かしい友のSである事を彼は知つた。

彼が頰の涙を奇麗に拭いてしまふ間もなくS、は部屋に入つて來た。そしてお互ひは喜しさの餘り固い握手を交した。キーツは再び涙が浮んで來るのをどうすることも出來なかつた。

「其後体の調子に變つた事はないかね」とS、は椅子に腰を下しながら云つた。

「有難う——」とキーツは顔を背けながら答へた「僕はどうせ駄目なんだ。生きやうといふ望みなんかない。」

「弱い氣を起してはいけない」とS、は彼を元氣付けながら云つた。「實はその事について僕は是非君に承知してもらいたい事があつて今日はやつて來たんだ。と云ふのは外でもないが、僕はかねて手紙で君に話したやうに、君の健康には暖い土地が最も必要なんだ。で僕は近い内に君を連れて伊太利へ行かうと考へてゐるんだが、君にそれを是非承知して欲しいと願ふのだ。君のやうな立派な詩人を英國が失ふといふ事はこの上もない大きな損失だと僕は確信してゐるんだ——」

キーツは答へなかつた。彼は今更この世の生活に對する未練などは決して持たなかつた。けれど友人のさうした親切な言葉には深く感謝しないでは居られなかつた。

「僕の事をそんなに迄思つて呉れる人は君以外には決してないと思ふ。だが僕はむしろ伊太利へは行きたくないと考へて

ゐるのだ。僕はこのまゝ英國で死にたいんだ。たとへどんな迫害に會つても僕には英國が一番なつかしい國なんだ。僕の生れたこのロンドンで僕はやはり死にたいんだ。僕の詩がたとへどんなにつまらない詩であつても、僕はそれらの總ての詩を眞心をこめて英國の人々の爲めに捧げたつもりなのだ」

「君の氣持は僕にもよく分る。僕は前にも云つたやうに、君こそ英國が生んだ最も偉大な詩人に相違ないと信じてゐるんだ。僕が云ふのは其所なのだ。僕がさう信ずればこそ、僕は君を失ひたくないのだ。僕は僕として出來るあらん限りの力を盡して君を必ず以前のやうな健康な人にかへしたいんだ。そして君にもつと〳〵多くの立派な詩を吾々英國人の爲めに殘してほしいと考へてゐるんだ。」

「有難う。だが僕の仕事はむしろもう終つてゐるんだ。僕は滿足して死にたい。今の僕の願ひとしては安らかな死があるのみだ。外に僕の希望は何もない。伊太利へ行つて再び健康になりたいとは僕は決して思つてゐないんだ。僕の心の慰めは唯英國にのみあるんだ」

「君がさう云ふのも決して無理ではないと思ふ。然しさうした考へ方は決して正當なものではないと僕は信ずるのだ。或は君の感情を害するかも知れないと思ふが、思ひ切つて云つてみれば、君のさうした氣持の背後にはやはりファンニイさんに對する君の心殘りがあるのではないだらうか。君の慰めであり力であつたあの人に對して、お互ひに別れてしまつた今でも猶、君は斷えず心を引かれてゐるのではないだらうか。僕はそれが惡いとは決して云はない。然し今の君がさうした氣持をいだくことは決して喜こばしい事だとは云へない。もつと大きな見かたを以てこの人生に當つて欲しい。愛人を君が失つたといふその悲しみには僕はあく迄も同情する。然しその事に心を使つて、詩人といふ君の天性を忘れて欲しくない。人の世の情愛よりも、君にはもつと大きな職責が天から與へられてゐるのだ。今は決して徒らに、過ぎ去つた事を悲しんでゐるべき時ではない。君は君の生涯の正しい目的たる詩作に向つて精進すべきだと思ふ」

友人S、のその言葉によつてキーツの頭の中には過去の心の痛みがよみがえつて來た。彼はもう友の言葉に答へる氣力もなかつた。彼は溢れる涙をじつとをさへながら、顔を背け庭の方を見るばかりであつた。彼は決して單に過去の心の苦しみにばかり氣を引かれて英國を去りたくないと考へてゐるわけではなかつたけれど、友達からさう云はれてみれば、自分が知らず〳〵の中にはかない此の世の憧れの爲に英國を去

る決心が付かなかつた事を、まさ〳〵と感ずるのであつた。例へ別れたとは云へ、唯一人の愛人であるファンニィの居る國を去る事がどうして出來やう――と考へてゐた彼の氣持は確かに大きな間違ひに相違なかつた。其處にはもつと力强いもつと緊張した詩作の世界があらねばならなかつた。生きねばならない。たとへ過去の希望や憧れの總てを失つても、詩人として生き、詩人として自己を正しく認識しなければいけない――と彼は考へるのであつた。

「僕が間違つてゐた――」とキーツは暫くして云つた「僕は自分では決して氣が付かなかつたけれど、やはり僕の氣持は君の云つた通り、ファンニーさん一人の上に止つてゐたのだ。そんな、過ぎ去つた、今更考へても及びも付かないやうな事に、氣を引かれてゐた僕は何といふ愚かな人間であつたのだらう。僕は嘗て君にも誓つたやうに、そんな過去の出來事などに決して迷つてゐるべきではなかつたのだ。――行かう、伊太利へ！。そして僕を元の健康な身体にしてくれ給へ。きつと僕は今迄よりも立派な美しい詩を作つて君に報いることを誓ふよ。僕の生活は詩作以外には無い筈なのだ。――」

「よく云つて呉れた。それでこそ君だ。決して心配することはない。僕が必ず君を元のやうな健康な身体にしてみせる。總てを僕に任してくれ給へ。伊太利へ、伊太利へ、君の新しい生活は其所で再び始まるのだ――」

「伊太利へ――」

キーツは友の手を握りしめて泣いた。たとへ全世界のあらゆるものを失つても、友のかうした力强い言葉だけは彼は決して忘れる事はないと思つた。

其夜は更けるまで二人は互ひに樂しく語り合つた。然し友が去つてしまつた後には、又云ひ知れぬ寂寥がキーツの身を襲ふのであつた。たとへ一度は堅い決心をしたとはいふものゝ、何故にこの思ひ出の國である英國を去るだけの勇氣が、病身の彼に湧き得やうぞ。―― 彼は再び數々の過ぎし日の出來事を考へ出さずには居られなかつた。

然し出發の日は間もなく來た。彼は力なく旅裝を整へて友人S、に伴はれて出發した。其時の彼はもう生ける屍に等しかつた。一切の希望を總ての願ひが、彼の心から去つてゐた。空うな体を彼は伊太利へ、そしてローマへ運んだのであつた。其地で、彼は翌年の二月、二十五歳の若い身を以て、淋しく死んでしまつたのであつた。

英國の詩壇にあれ程偉大な感化を殘してゐる彼にしてはその死は餘りにも早く、そして餘りにも傷ましいものであつた。

今では古今の絶唱として讃へられてゐる彼の詩の多くが、當時は殆んど世人に認められることなく、彼は徒らにさうした若い身でローマに客死せねばならなかつた。さうした彼の心情に對してはいくら多くの同情を以てしても充分とは云へないであらう。たとへ宿命的な病氣にかゝつた爲めとは云へ、世の批評家達が彼にもつと親切であり、そして彼の唯一人の許婚者であり愛人であつたファンニーが彼にもつと優しかつたなら、恐らく彼はもつと幸福な生涯を持つ事が出來たものをと誰れしも考へないでは居られない。あらゆる希望を失つた彼が異鄕の地に於て友人S、に守られながら空しく去つて行つた其日を思ふ時、誰しも同情の涙を流さない者はない。彼の墓は今猶ローマにあるが、其地に遊ぶ英國人は必ず彼の墓に詣でる事を決して忘れないのである。

輝く星のやうに永しへに生きたい――(Bright Star! would I were steadfast as thou art――) これこそ彼が英國を去るに當つて歌つた最後の彼の詩の一行である。

自己を歌ふ

波多野雅一

○歌ひたい心持

世の中の人間はみんな詩人だ。

美はしい自然界の眺、美はしい人情味のある行爲を見ては誰しも歌ひたい氣持になる。

この感情を要領よくうまく表現した人が世の所謂詩人なのだ。

○流　行

流行なんて何だ――他人の眞似ばかりして得々としてゐる自己の好みを忘却しためづらしがりやの所作だ。

○ルンペン

ルンペンも一種の正しい生活樣式だ。

天涯の孤兒――ルンペン自身には理想の生活なのだらう。

○科　學

科學の發達は人間生活に利用して人生を幸福ならしめる程度でよいのだ。

科學の眼鏡を以て宇宙の森羅萬象を見貫いたら、自然界の神秘性が無くなり我々の住む宇宙が狹くなる。

程度以上の科學の進歩は吾人の生活を淺薄なものにするだらう。

健康と私

田中正夫

「先づ健康」!! 何んと云ふ簡にして要を穿つたモツトーであらう。此の言葉が以前にもまして痛切に肺腑を刳らずには居られない今日の私であります。

思ひ起せば早や五年前だ。思はず戰慄を催して冷い魔の手が體を壓して膚に粟を生じて來るのです。あの陽氣は長閑な甘い天國の春に往時の偉人英雄君子を念頭に浮かべ未來の活躍を夢みながら校門をくゞつたのは。中學生活!! 未知の世界がパツト眼前に展開された。それは實に樂天地でした。模糊として白雲に紛ふ櫻花!! 綠したゝる若葉!! 彼等は私をば樂しいピヤラダイスにしばし醉はしめてくれた。しかし圓らかなりし甘い夢も短い一學期の終りに早や根こそぎに破られてしまつた。病魔の侵す所となつて病院の白いベツトに臥してつれ〴〵な毎日を送らねばならなかつた。そして一時は重態を傳へられたが幸にして父母の手厚い看護にやつと死線を突破して一年の後には懷の校門をくぐる身となつた。

長く芝蘭の室に居れば其の香を忘れると云ふが誠に然りであります。世人は往々にして强固なる身體に托し、血氣にはやつて如何なる富貴にも代ふ事の出來ない尊い健康をば猥りに浪費して一朝目覺むる時眼前に閃めくものは既に灰色の敗殘者の影であります。貴重なる健康の使命の何處にあるかを忘却して、徒らに一個の利害に汲々として居る者を見受けるが彼等は人間の最大幸福の何物にあるかを認識して居ない者ではあるまいか。縱令大學を首席で卒業するとも柔弱で病床に臥する者と學は彼に劣るとも强健なる身體を保持する者と比較する時後者がいかばかり世に貢獻するかは論を俟たない事で實に雲泥の差があります。

翻つて我身を顧りみる時暗然として落膽せずには居られないのです。勉强はしたい、やれば人後に落ちないだけの自信はある。それに勉强出來ない。夜遲くまでやると翌朝頭ががらんとして雲を摑む樣で痛の光が腦裡をかすめて行く。風邪だ!! 腸がグウ〴〵鳴る。心配だ。神經が鋭敏になつたせいか醫師に診て貰はねば安堵が出來ない人生の「落伍者」その感が私の頭に强く喰ひ込んで行く。思へば五年の一學期の始め風邪がもとで一月程休み登校したのも試驗前で病後の事とていゝ加減に終つた。目ざすは次の學期試驗!! 人一倍の努力を拂つて鮮やかな赤いアンダラインが心地よく引かれて手に取る如く頭に描き出される。得意だつた而るに一月の努力も水の泡試驗の日から又も臥床を餘儀なくされ遂に長蛇を逸してしまつた。私はあまりにも運命の皮肉の惡戯に男泣きに泣かされた。而して數日の試驗日をいかに苦悶の內に過した事か。皆のひき締つた顏!! ペンを走らす得意な顏!! 髣髴として眼前にちらつき、一夜をまんぢりともせず齒を喰ひしばつて過した事が幾度か、熱い涙が嗚咽の度毎に頰をつたつた。嘗ての愉快な空想の夢に一度でも耽りたくなる。徹夜をやらんとした意氣が欲しい。今では徹夜なんか夢想さへ出來ない境遇だ。飢へて始めて一片のパンの値を知り、凍えて始めて一枚の布子の尊さを知る。阿鼻叫喚の內に悶えながら救を求む頭上に赫灼として輝く光!! それは健康の光でなくて何であらうか。

私は始めて健康の至要を知ると共に此の塗炭の苦しみを脫して暗黑の世界より絢爛たる健康の世界に浮び出て健康の幸福を心ゆく迄享樂したいものだ。

私は悲壯の內にも意氣軒昂、捲土重來の意を以て健康奪回の旗幟を押し立て旺然として價値ある生活建設を目標に猛進せんことを誓つた。

純眞な心

藤野精一

七月二十日あまりの月は皎々と輝いて、さへぎる雲もなく彼方山際まで一望の下に集まつてゐた。且涼風肌をなでて稀な良夜であつた。

其夜、夜番の順が廻つて來たから、僕はすきとほる月光を浴びて、口笛を吹きながら拍子木の音も靜かにさえて夜を驚かした。最初北方に向つた。街燈の光も月光に影を失ひ夜のあらゆる條件を具備した晝の如く明るかつた。

とある辻まで來ると、五六才の小供が一人ポツネンと人待ち顏に立つてゐた。そして其姿は月光の中に浮んで、ある一